

白山ふるさと文学賞

第八回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【島清部門】

中高校生小説の部 最優秀賞

スキナコト

松任中学校二年

木下きのした

千尋ちひろ

それを理解した瞬間、私の頭は真っ白になった。

「落ちた：？」

周りが喜んだり、泣いたりしている中、私は呆然とある一点——オーディション結果の発表用紙を見つめた。いくら探しても、私、三谷那湖の名前は見当たらない。フルートパート2年と記すそこには、私の名前のかわりに矢沢有沙、という名前が事務的に居座っていた。

私の所属する吹奏楽部は、ほかの中学と比べて人数が多い。しかし、毎年参加する吹奏楽のコンクールには定員がある。なので、毎年2、3年生の中からコンクールメンバをオーディションとして選抜するのだ。そのオーディションに落ちた私。自信はあった。受かるつもりでいた。なのに——。

「なんで、有沙が。」

練習時間に入って、有沙は楽しそうに先輩や後輩と話し出す。ときどき『受かって良かった』『おめでとう』などという言葉がきこえる。私は教室の隅で壁を向いて座り、静かに練習の準備を始める。

有沙とは、部活に入って仲良くなった。2人でフルートになったときは喜んだし、部活ではずっと一緒にいた。社交性があり、可愛らしい容姿の有沙は、少し気が強いところもあるが皆に人気がある。有沙にコンプレックスを感じるときもあつたが、それでも同じフルート好きとして仲良くやっていた。そんな有沙に初めてフルートで「負けた」。音楽は勝ち負けではない、そんなことは重々承知している。しかし、この胸には、どうしようもない苛立ち、不安、苦しさ、そんなかんじの暗い感情のしかかってくる。

私は時々感じる気づかうような視線を、あえて気付かないフリをして今日の部活を終えた。練習は身に入らない。結局有沙はおるか、誰とも会話をしなかった。

次の日。私の心はいまだ晴れないまま。

「うっそー、美歌、そんなありえる〜？」

「それが本当なんだって！」

クラスを中心グループの女の子たちの楽しそうな声すらもわずらわしい。有沙とクラスが違うのが幸いだ。

オーディションに落ちたショックがおさまり、次に沸いてきたのは「怒り」だった。昨日の様子からも分かるように、有沙は真面目に練習などしていない。すぐにしゃべるし、バカ話で盛り上がる。そんな有沙だから、オーディションには自信を持てた。ヘマをすることもなかったと思っている。なのに。ギリ、と奥歯をかみしめる。

「なんで、有沙なの：!!」

「—でさー、意味分かんなくない？なんで私が、練習してない有沙に負けなきゃいけないわけ？ってカンジ。」

たまったイライラを友達にグチる。「そーだよねー。」「絶対那湖の方が上手いやつ。」そんな友達のがくさめ、同情の言葉に、私の心はスッキリと晴れやかになっていく。

「有沙超調子のつてる。受かったくせにマトモに練習しないし。」

がんばっていないくせに。そんなので有沙が受かったのが許せない。ありえないよねー。そう笑ってくれる友達に、私も笑い返した。

それから、私は部活で有沙と行動を共にすることをやめた。有沙とはあれから会話もしていないし、私は有沙を避けていた。有沙や他の人がコンクールの曲を練習しているのを聞くだけで苛立ちがつのる。友達に「有沙と一緒にじゃないの？」ときかれて、怒鳴り散らしたくなった。ありえない。誰が有沙なんかと！日々のストレスは友達にグチって発散する。そんな日々が続いたある日。私は昼休み、先輩に呼び出された。

「：：どうしました、先輩。」

私は無表情に尋ねた。

「：：那湖、いいかげんにしてくれない？」

「…なんのことですか。」

「最近の態度よ。みんな落ちこんでると思ってる気を使ってるけど、そろそろ空気を悪くするのはやめて。有沙も心配してるし、那湖に避けられてるって落ちこんでたわ。」

…また、有沙。私が悪者みたいじゃないか。みんな有沙の味方。私の気も知らないで。ぐっとだまってるって、先輩が続けた。

「自分が落ちて有沙に嫉妬するのも分かるけど。」

…嫉妬？私が、有沙に？

「そんなんじゃないです。私はただ。」

「ただ？」

「…なんでもないです。話はそれだけですよね。私、もう有沙と仲良くする気ないんで。失礼します。」

「ちよ、那湖！」

私は足速にその場から立ち去った。そう、私はただ、遊んでいる有沙が選ばれたのが許せないだけなのだ。なのに、なぜか口に出ることが出来なかった。それを口にする、私は本当の意味で有沙に「負ける」。そんな気がした。

私はトイレにかけこむ。個室のカギをかけて、深呼吸をする。少し落ちついて、教室に戻ろうとカギに手をかけた、その時。

「そういえばさー、最近那湖、有沙の悪口やばくない？」

ドクン

反射的にカギから手を引いた。心臓が早鐘のように打ちだす。

「え、そーなの？」

「そーそー。なんか那湖がコンクールのオーディション落ちて、有沙は受かった、みたいなの？有沙ががんばってないくせにーって。」

「うわー。そーゆーのね。」

「いや、自分はどーなのさ、ってかんじ。結局受かったの有沙だし。」

「それな。ようするに嫉妬でしょ？」

話しているのは女子数人。私がグチを言った友達の声もする。

頭が真っ白になった。体が震える。しばらくして女子たちの気配が去っていくと、私は全身の力が抜け、へなへたと床にすわりこんだ。まだ心臓はドクドクと激しく打ち続けている。

そして、その日から私は―部活に行けなくなった。

「さようなら。」

私が部活に行けなくなっちはや一週間。コンクールは刻一刻と迫ってきている。あの日から私は、帰りのHRが終わるとすぐに学校を飛び出す。吹奏楽部が練習をはじめ、その音がきこえないうちに。そして、家族に部活に行っていないことがばれないように、何時間も学校から家の間付近をさまよい歩いていた。

今日は学校近くの川にそって堤防を歩いていた。何も考えずにふらふら歩いていると、いつの間にか空が赤くなり、北の方はすでに群青に染まっていた。ぴゅつと冷たい風が吹く。1人ぼっちでさまよい歩く。

「…：つ、みじめ、だなあ。」

もう帰らなくちゃ、と思い、家の方向に足を向けようとした、その時。

「―なにか、きこえる。」

そつと目を閉じ、耳を澄ますと、やっぱり何かきこえてきた。多分、歌だ。

見渡すと、少し遠くに、髪の毛の長い女の子が立っているのが目に入った。こっそり近づくと、やっぱりその子からきこえてくる。私とその子との距離が近づくと、今度ははつきりと歌がきこえた。

「―っ!!」

私と同じ学校の制服で、リボンの色が同じだから同じ学年だ。腰までとどききれいな巻き毛が風にゆれる…その子からとどき歌は、上手い、なんてものじゃなかった。どこからそんな声が出るのか、と思うほどの声量。澄き通るように美しく、それでいて圧倒的な存在感。そして―そ

の声にのせられる、豊かな感情。…ああ、先生がいつも言う、「表現する」って、こういうことなのか。

私は最後までききいってしまい、終わった後拍手までしてしまった。ビクツとしたその子は、バツとこつちを振り向いて—って、え？

「美歌ちゃん!？」

「那湖ちゃん?」

その子—美歌ちゃんと私は互いの顔を認識した瞬間、目を丸くして声を上げた。

「びっくりした…。美歌ちゃんって、すごい歌上手だったんだね。天才かと思つた。」

「天才って…。あたしなんてまだまだ。努力が足りません!」

けらけら笑う美歌ちゃん。意外に話しやすいことに、私は少し驚く。なにしろ彼女はクラスを中心グループのリーダー格なのだ。こんなふう隣に座って話すなんて思つたことすらない。さっきまで彼女が美歌ちゃんだと気付かなかつたのは、いつもは2つにおだんごにしている髪がおろしてあつたからだ。

「気付かなかつた。雰囲気違ふんだもん。」

「あー、まあね。いつもは全然まともに歌わないし。ほら、やっぱり。」はすかしいもん。そう言つてはにかむ美歌ちゃん。その笑顔は普段よりずっとやわらかい。

「すごいね。こんなに上手いのに、まだ努力が足りない、なんて。」

「…全然。最近やつとまともに練習し始めたかんじだし。あたしのコーチはスパルタでね。」

そう、おどけて笑う美歌ちゃん。

「好きなんだね、歌が。」

そう言うと、彼女は照れたように、でもまっすぐな笑顔で言った。

「うん。大好き。」

その笑顔はすごくキラキラしていて、本当に大好きなんだって伝わってきた。…少し、まぶしく感じる。

「そ—いえば、那湖ちゃんはなんでここに?吹奏楽部だったよね。今は部活じゃないの?」

「…っ!!」

無邪気に尋ねてくる美歌ちゃんの言葉に、ギョツと胸がしめつけられる。多分顔が歪んだのだろう。美歌ちゃんの表情がくもつた。

「何か…あつた?」

優しい声に、私は知らないうちに今までのことを話しはじめていた。

「なるほど。それで部活に行けなくなったわけだ。」

「…うん。」

…苦しいし、恥ずかしい。うつむいてしまった私の頭を、美歌ちゃんはポン、と優しくたたいた。

「コンクールか。厳しいね。多分那湖ちゃんはさ—」

—また、嫉妬してる、と言われるのか。そう思つた瞬間、頭に血がのぼつた。

「美歌ちゃんに何が分かるの!!」

はっ、と気付いたときには、時すでに遅し。美歌ちゃんはちよつと目を見開いて、それから—ふわり、と笑う。

「分かんないよ。」

あたし那湖ちゃんじゃないし—、と笑う。

「だから、今の話であたしが感じたのは、」

美歌ちゃんは私の瞳をじつと見つめる。

「—那湖ちゃんは、大好きなんだね、フルートが。」

…息が、止まった。ドク、と心臓が大きく鳴る。恥ずかしくて、苦し

いのに、その言葉がストンと胸に落ちた。少しだけ泣きそうになる。

「だから那湖ちゃん—つらかったね。」

ふわり、私の体を美歌ちゃんが包みこんだ。

「もう、我慢しないでいいよ。」

「—う、うわああああ!!」

もう、だめだ。涙が止まらない。

—本当は私、気付いてた。本当にこれが、ただの嫉妬であることに。ずっとずっと、悲しかった。苦しかった。落ちてショックで、悲しくて、悔しかった。有沙が羨ましかった。ただ、自分の弱いところから、目をそむけていただけだった。全部有沙のせいにして。

—けど、私はそんな自信を持つほどの努力をしていたのか。そんなこと—自分で分かりきっている。記憶を呼び起こせば、有沙や他の先輩後輩たちと話している記憶しか出てこない。

いいかげん、認めなくちゃならない。自分の汚点、誤ちを。

私の背中を抱きしめながらずっとさすってくれていた美歌ちゃんは、私が泣きやんだのを見計らって、言った。

「那湖ちゃんは、これから何をしてもいい。部活をやめても、有沙ちゃんたちと縁を切ってもいい。その上で—那湖ちゃんはどうしたい？」

私は思いうかべる。有沙や先輩後輩、友達、そして—大好きなフルート。

その上で。

「私、は—。」

コツ。私のくつの音が戸の前で止まる。深く息を吸って、吐く。戸に手をかける。心臓が異様に音をたてる。そして。

ガラッ!と戸を—フルートパートの練習場所の戸を—聞いた。

「那、湖…。」

「…有沙。」

教室には有沙しかいなかった。目を見開く有沙の前に進んでいく。有

沙を正面から見つめると、逃げ出したくなった。恥ずかしい。緊張する。—怖い。だけど。

「…ごめん、有沙。」

「へ…。」

「有沙にすごい嫌な思いさせたよね…。勝手に嫉妬して態度悪くして…ごめん。」

バツ、と頭をさげる。

「や、やめてよ那湖。びっくりするじゃん。てゆうか、部活来てよ!心配する。」

「…ごめん。」

顔を上げると、苦笑いする有沙がいた。こんな有沙に私は何を言えればいい。もうこんなことしない。応援してる。私は、そんないい子じゃない。多分これからも私は迷惑かけたり、きずついたりすると思う。だけど。

『私、は—好きなことをあきらめたくない。』

あのととき、美歌ちゃんが言ったように、私もフルートが大好き、と胸をはりたい。

だから。私は有沙に、不敵な笑みを向ける。

「でも—次は、勝つから。」

有沙も、不敵な笑みを返してきた。

「私も、負けないよっ」

—好きなことを追いかけていきたい。